法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

ICCの向上を目指す英語教育 : Flipを使った小規模な異文化交流における学びの分析

栗田, 智子

(出版者 / Publisher)
法政大学図書館司書課程
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
メディア情報リテラシー研究 / The Japanese Journal of Media and Information Literacy
(巻 / Volume)
5
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
96
(終了ページ / End Page)
107
(発行年 / Year)
2024-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00030942

法政大学図書館司書課程
メディア情報リテラシー研究 第5巻1号、096-107
特集：デジタル時代の異文化交流と外国語教育

ICCの向上を目指す英語教育：Flipを使った小規模な異文化交流における学びの分析

栗田智子
中央大学国際情報学部

概要

近年、テレコラボレーションによる異文化体験が可能となり、多くの研究者が ICC の向上を目指す外国語教育のアプローチとして、「テレコラボレーション」に注目している。本研究では、ICC の向上を目指す英語教育として、Flip（旧 Flipgrid）を使い、メキシコの英語学習者（中高生）と日本の英語学習者（大学生）とのシンプルな非同期型テレコラボレーションによる交流を通して、学習者が何を学びどのように変化したのかを明らかにする。分析の結果、学習者は、無意識に持っていたステレオタイプに気づき、交流前に抱いていたメキシコの文化についての印象や固定観念、偏見を変化させたことなどが明らかとなった。また英語については、伝える重要性に気づき、発音、抑揚、表現の方法を修正したことなどが明らかとなった。

キーワード

異文化交流、テレコラボレーション、ＩＣＣ、英語教育、ステレオタイプ

1．はじめに

Byram（2008）[(1)]は、言語の機能とその使い方だけに注目してきた言語教育の時代はもはや終わり、文化を含め、市民形成、社会参加などの広い枠組みで言語教育を捉え直し、言語教育の目的について問い直す時代がきていると主張し、個人が遭遇する様々な文化的出会いによって、一人ひとりの違いに気づき、自分と他者の属する社会の問題点に気づき、新しい世界市民として生きていくための政治性を身につけていくために、言語教育における Intercultural Communicative Competence: ICC（異文化間コミュニケーション能力または相互文化的コミュニケーション能力以下 ICC とする）の育成の重要性を示した。

この ICC は、Byram（1997）[(2)]によって「知識：自己と他者に関する知識、相互交流に関する知識、個人や社会に関する知識」、「態度：自己を相対化する態度、他者を評価する態度」「スキル：解釈と関連づけのスキル」、「スキル：発見とまたは相互交流のスキル」「教育：政治教育、

クリティカルな文化意識」の 5 つの要素に分けて定義された。海外では、言語学習における ICC の必要性が言われ、アメリカ（ＡＣＴＦＬガイドライン）やヨーロッパ（ヨーロッパ言語共通フレームワーク）の国家基準に盛り込まれることで強調されている（Godwin-Jones,2013）[(3)] 近年、テクノロジーの発達により、テレコラボレーションによる異文化体験が可能となり、多くの研究者[(4)]が ICC の向上を目指す外国語教育のアプローチとして、「テレコラボレーション」に注目している。

こうした背景から、日本の英語教育においても、「英語力向上」と「ICC の育成」という 2 つの目的を果たすために、テレコラボレーションによる異文化交流の実践研究は、益々重要になると考えられる。筆者もこれまで、テレコラボレーションによる国際協働学習を英語授業に導入してきた。しかし、栗田・滝沢（2021）[(5)]が指摘するように、忙しい教員にとって、時間不足と調整の難しさが課題となっている。そこで、ICC の向上を目指す英語教育の入り口として、よりシンプルで、準備や調整が容易な小規模な非同期型のテレコラボレーションによる異文化交流を試みた。

本研究では、ICC の向上を目指す英語教育として、Flip（旧 Flipgrid）というコミュニケーションツールを使い、メキシコの英語学習者（中高生）と日本の英語学習者（大学生）とのシンプルな非同期型テレコラボレーションによる交流を通して、日本の英語学習者が何を学んだのかを明らかにする。

２．先行研究

テレコラボレーションとは、オンラインコミュニケーションツールを使用し、他国の学習者同士が協働作業や異文化交流をすることである[(6)]。テレコラボレーションを教育活動に活用する効果として、言語習得の伸び（Hirotani & Lyddon,2013; Young & West,2018）[(7)]、モチベーションの向上（Fujii et al,2015）[(8)]、異文化理解能力の向上（Byram,1997; Jauregi & Canto,2012）[(9)]などが報告されている。しかし、課題もあり、藤井他（2016）[(10)]は、教員の綿密な準備、参加者のコミュニケーションストラテジーとテクノロジーリテラシーがないと難しいと指摘している。

テレコラボレーションには、Zoom などを使いリアルタイムで交流する同期型交流と、ビデオレターやメッセージの投稿によって交流する非同期型交流がある。特に、非同期のマルチメディアベースのオーラルコミュニケーションは、学習者がプレゼンテーション・スピーキングスキルを身につけ、言語的自己認識を高めるのに役立つと言われる。Young and West（2018）[(11)]が、非同期型のオーラルコミュニケーションスタイルを使用した研究に関する 22 点の論文を調査した結果、このような非同期型交流を使った学習では、学習言語使用時の流暢さ、正確さ、発音が上達することが示された。

日本におけるテレコラボレーションの先行研究は、複数のアプリを併用した大規模な実践が目立つ。古村（2022）[(12)]は、コロナ禍のオンライン英語授業の一環として、「英語力の向上」と「異文化コミュニケーション力の向上」の 2 つを目的とした実践として、8 週に渡るプロジェク

トベースのオンライン異文化交流をコスタリカの学生と行った。その結果、学生は「言語的、コミュニケーション的、複言語的スキル」に最も成長を感じたことがわかった。他に、「価値観：あいまいさへの寛容さ」、「自律的な学習スキル」、「対立解決のスキル」に関する質問項目に有意差が認められた。このプロジェクトベースの異文化交流は、Flipgrid（現 Flip）を含め 3 種類のアプリを使って、4 技能（読む、書く、聞く、話す）に対応している。また、山本他（2020）[(13)]は、アカデミック・ライティングの授業で、15 週にわたり日本の学生と台湾の学生が協働チームでプロジェクトを進める Team-Based Learning 型の協働授業を行なった。Flipgrid（現 Flip）をエンパシービルディングの段階のみで使い、その後は Padlet、Google Drive と Turnitin Feedback Studio を使用した。

藤井他（2016）[(14)]は、身近なテーマについて実践的な学習言語使用の場を提供するために、Facebook を使い、アメリカの日本語学習者と日本の英語学習者間テレコラボレーションをおこなった。タスクデザインにおいては、指導教員同士の綿密な打ち合わせと参加者のコミュニケーションストラテジーとテクノロジーリタラシーの向上が、成功のための課題であると分析している。

以上のように、日本においても、英語力向上と ICC の向上を目指す英語教育を目的としたテレコラボレーションの実践と研究が行われているが、授業全体を使った大規模な実践が多い。

３．研究目的と分析方法

本研究の目的は、Flip を使った小規模の非同期型のテレコラボレーションによる異文化交流の実践を通し、日本の英語学習者が、何を学び、どのように変化したのかを明らかにすることである。

研究設問は、以下の 2 つである。

１）動画投稿の非同期型テレコラボレーションを通して、文化について、日本の英語学習者（大学生）は何を学び、どのように変化したのか。

２）動画投稿の非同期型テレコラボレーションを通して、英語について、日本の英語学習者（学生）は何を学び、どのように変化したのか。

分析方法は、以下の日本の学習者対象のアンケートと振り返りの分析による。

①　異文化交流前アンケートと異文化交流後アンケート

②　第 1 回、第 2 回、第 3 回交流後の振り返り

アンケートと振り返りは、大学のＬＭＳのアンケートセクションで作成し、回収した。

調査対象は、日本の私立大学 1 年の通年の必修科目「統合英語」の英語学習者 17 名である。このコースは、4 技能統合のインプットとアウトプットの活動を通じて、4 技能を向上させることが主な目的である。全クラス共通の教科書、共通のシラバス、共通の評価方法に従って、複数の教員が授業を行っているが、その中で担当教員のオリジナル・タスクが、評価の 10％を占めており、各々の教員が自由にタスクをおこなっている。筆者は、そのタスクとして、授業の一部を使い、小規模のテレコラボレーションによる異文化交流を実施した。

４．研究対象テレコラボレーションによる異文化交流の概要

実践した異文化交流の概要を説明する。日本の英語学習者（大学生）17 名とメキシコの英語学習者（中高生）22 名の間で、10 月から 11 月末に渡り、3 回のテレコラボレーションによる異文化交流を行った。

非同期型オーラルコミュニケーションツールとして Flip（旧 Flipgrid）のみを使用した。Flip は、Microsoft 社が提供する動画シェアの無料クラウドサービスアプリで、参加者全員の動画を閲覧することができ、互いにコメントや質問が書き込めるようになっている。授業で Flip を活用した山下（2021）[(15)]は、概ねの学生が「Flipgrid の使い方は簡単だった」（p.56）と感じ、「英語コミュニケーションの学びに役立ったと感じているだけでなく、比較的楽しみながら取り組んだ」（p.56）と報告している。

教員が Flip のアカウントを作り、共有ページを作成する。交流方法は、交流のトピックとなる 1 つの質問に対し、日本、メキシコ双方の英語学習者（非英語母語話者）が答える形でスピーチを録画しアップする。両国の授業日が異なるため、1 週間以内にアップを完了するようにした。3 回のトピックとなる問いは以下の通りである。

第 1 回交流 10 月第 1 週

Introduce yourself and reply to the question below.

メキシコの学習者に対して :What are three things that come to mind when you think of Japan or Japanese culture? And why?

日本の学習者に対して :What are three things that come to mind when you think of Mexico or Mexican culture? And why?

第 2 回交流 11 月第 1 週

メキシコの学習者に対して：What did you think about the Japanese students' impressions of Mexico? Please explain one thing you would like the students in Japan to know about Mexico or Mexican culture.

日本の学習者に対して：What did you think about the Mexican students' impression of Japan? Please explain one thing you would like students in Mexico to know about Japan or Japanese culture.

第 3 回交流 11 月第 3 週

両国の学習者に対して：What do you usually do on weekends?

これらの問いは、ICC の中の「知識：自己と他者に関する知識、相互交流に関する知識、個人や社会に関する知識」と「態度：自己を相対化する態度、他者を評価する態度」、の育成をヒントに考えたものである。最初に「相手国の国や文化に関するイメージ」、次に、「自国文化で相

手に伝えたいこと」最後に、「週末の過ごし方」をお互いに伝え合うようにした。

次に、日本の英語学習者は、メキシコの英語学習者がアップした動画を全て見て、コメントや質問を英語で入れる。メキシコの学習者も同様にコメントや質問を英語で入れる。

日本の学習者には、動画の録画とアップは宿題とし、授業の中では、メキシコの動画を閲覧しコメントを投稿してもらった。Flip 上に投稿された動画には、キャプション機能がついており、音声認識による英語字幕を見ることができる。メキシコの学習者の英語の聞き取りが難しい時に使うことが理解の助けになるだけでなく、日本の学習者が、自分の動画の字幕機能で、自分の発音がどのように音声認識されているかを確認することができる。

両国の動画を見た後、交流後の振り返りを LMS のアンケートセクションに書いてもらった。

５．結果と分析

まず、初めに、異文化交流前アンケート（N ＝ 17）と異文化交流後アンケート（N=17）の結果について説明する。交流前アンケートで、これまで学校で異文化交流をしたことがあるのは 3 名で、14 名の学習者が初めての異文化交流であると回答していた。「メキシコと交流すると聞いてどう思うか」という問いに対し、「自分の英語が伝わるかという不安」もある一方で、全体として、「楽しみ」という前向きな回答をしていた。

異文化交流後アンケートでは、「Q1 メキシコとのオンライン異文化交流はどうでしたか」という問いに対して、「大変良い経験だった」と答えた学生は 10 名、「良い経験だった」と答えた学生は 7 名、「あまり良い経験ではなかった」「全く良い経験ではなかった」と答えた学生はいなかった。「大変良い・良い経験だった」と答えた理由（Q2）として、「今までメキシコという国について考えたこともなかったこともあり、英語を学ぶだけではなくメキシコの文化について知れたので良かったと思いました」、「メキシコについて新たな発見があっただけでなく、自分の英語のスピーキングの能力の現状がわかり、課題も見つかったから」、「ある程度メキシコのことを知ることができたし英語で話して伝える練習にもなったから」、「相手の文化を知れることと自分の伝えたいことを表現することに取り組めて勉強になったと感じた」と回答した。

「Q3 第 1 回、第 2 回、第 3 回と交流する中で、メキシコについてのイメージや考えは、交流前と比べて変わりましたか」という問いに対し、「とても変わった」が 3 名、「変わった」が 11 名、「あまり変わらなかった」が 3 名、「全く変わらなかった」はいなかった。「とても変わった・変わった」と回答した理由について、「日本と大きく異なる部分もあったが、週末の過ごし方はあまり日本人と変わらなかったりと、自分のイメージと異なり、意外と日本人と大差ない部分もあったため」、「メキシコに関して知っていることが食べ物とお祭り、観光地の町並みぐらいだったため、メキシコといえばというものを教えてくれたり、休日に何をしているかを教えてもらうことで、メキシコに関してのイメージが広がったから」、「遠く離れた土地だから全く日本とは違うと思っていたが、共通点を見つけることができたから」、「メキシコという国のいい意味でも、悪い意味でも偏見を持っていたため、リアルなメキシコを知ることが出来たから」、「メキシコの

人がどのような人なのかイメージがなかったので、今回直接交流できて知ることができたから」「メキシコは法律が緩く荒れたイメージがあったが同じ人間だなあというイメージになった」「メキシコの人は活発なイメージだったけど、穏やかな人もいらっしゃって、多種多様だなと思いました」と回答した。この結果から、交流前にメキシコに対して偏見を持っていた学習者がゼロではなかったと知った。この交流を通して、学習者のメキシコについてのイメージや考えを変えたことがわかった。例えば、メキシコ人と自分達との共通点や、異文化と言っても日本人と変わらないことに気づき、同じ人間だと感じたことが明らかとなった。メキシコ人という集団ではなく、個人個人で違うことに、今回気づいた学習者もいたことがわかった。

「Q4 第 1 回、第 2 回、第 3 回と交流する中で、自分のスピーキングの方法や英語に対する考えに変化はありましたか」という問いに対し、17 名全員が「あったと思う」と回答した。そう答えた理由（Q5）として、整理すると 5 点挙げられる。

1 つ目が「伝える意識の高まり」、「伝えることの重要性への気づき」があったからという理由が最も多かった。「最初のうちは恥ずかしさなどで慣れなかったけど、伝える意識が高まったと感じる」、「いろんな人に伝わるような発音、話し方を心がけようと思ったから」、「相手に、より正確に意味を伝えることを重要視するようになったから」、「ジェスチャーを加えたり、より伝えやすくするにはどうすればいいか考えることができた」、「伝えようとする意志がめばえた」、「発音や抑揚が相手に伝える上で非常に重要だと感じた」と回答した。

2 つ目に多かった理由は、「自分の録画を見たことにより、自分のスピーキング課題に気づいたから」であった。「これまで、自分がスピーキングをしているところを動画に撮って、改めて見てみる機会はなかったが、今回改めて見てみて、カタカナっぽい発音の部分が多くあったため、もっと、流ちょうにしゃべれるようにならなければと感じたため」、「録画を見ると自分では思っていないほど、抑揚がないことに気づいた。抑揚がないからか自分の言葉で喋っている感じも伝わってこなかった。そのため、回を重ねるごとに、作った原稿をなるべく覚えて自分の言葉で話して強調したいところは強めに言おうと努力するようになったため、自分のスピーキングに対する姿勢は変化したと思う」「今まで以上に発音を意識するようになった。」と回答した。

3 つ目に、学習者が、メキシコの学習者の上手な英語を聴いたから、変わったと回答していた。同じ英語学習者であるメキシコの中高生の英語を聞いて、自分の学習意欲に刺激を受けたことがわかった。「やっぱり、メキシコの生徒はみんな発音がすごかったので、勉強になりました」、「メキシコのみんなのように自信をもって自分の英語が喋れるようになりたいと思った」、「年下のメキシコの子達の方が英語力があって、発音も内容も負けてしまっていたので、このままではまずいと思い直すことができた。メキシコの生徒たちは日本の生徒のスピーチと違い、エネルギッシュであった」、「良いお手本がいたから」と回答していた。

4 つ目として、自分のスピーキングの向上を感じたと回答した学習者がいた。「スラスラ英語が話せるようになったように感じました」、「発音のコツをつかめた気がするから」、「最初より堂々と話せるようになった気がする」と回答した。

5 つ目に、コミュニケーションツールとしての英語の重要性に気づいたことが明らかになった。

「英語を使うことにより、他の国の人とコミュニケーションをとることができることを実感したので、英語はとても重要なものだと感じたから。」「そして、英語の大切さにも改めて気づいた。」と回答した。

「Q6 今回の交流を終えて、ステレオタイプについて、あなたがそうだと思うものを全て選んでください。（複数回答）」という問いに対し、「ステレオタイプは、必ずしも当てはまるものではない」と回答した人は、13 名、「ステレオタイプは、ポジティブなものとネガティブなものがある」が 11 名、「ステレオタイプは、人を傷つけてしまう場合もある」が 7 名、「ステレオタイプに当てはめることは、異文化コミュニケーションの障害となる」が 8 名であった。アンケートの結果は以上である。

次に、各回の交流後の振り返りの結果について説明する。紙面の関係で全ては公開できないため、5 名（学生 A、B、C、D、E）の学習者の振り返りを公開する。

第 1 回交流後の振り返りの結果

学生 A「自分の英語が伝わるか、相手の英語が聞き取れるか心配だった。

メキシコの方たちが笑顔で話してくれていて、自分も今後笑顔で撮った方が相手も今後交流しやすいと思った。日本のイメージでアニメが多いのは予想していたが、テクノロジーと言っている人がとても多くて驚いた。侍についてはステレオタイプだと思った。メキシコの生徒は、笑顔で、自分の言葉で話している印象を感じた。自分は、作った原稿を話しているだけで感情が感じられないと思った。メキシコについては、スポーツや食べ物をあげている人が多いイメージだった。ソンブレロはステレオタイプかもしれないと感じた。次回は、もっと自分の言葉で話しているように感じられるよう、感情や抑揚をつけながら言えるようにする。」

学生 B「自分の英語が相手方にしっかり伝わるかどうか心配だった。メキシコのみんなは英語がペラペラだと予想していた。メキシコのみんなは笑顔がすてき。外国の人に意見を聞くことは興味深いと思った。日本について、寿司とアニメに対するイメージが多かった。メキシコのみんなは自信をもって英語をしゃべっているように見えた。メキシコのみんなは原稿を読んでいる感じがしなく、自分から出てきた自分の英語をしゃべっているように感じた。自分のビデオを見て、声が小さくて聞こえにくいかもしれないと思った。もっと笑顔で感じよく英語が喋れるようになりたいと思った。メキシコに対してはスポーツが盛んで陽気な人が多いというイメージを持っている人が多かった。次回のメキシコのみんなの返答が楽しみだ。次回は大きい声で聞き取りやすい英語を目指す。」

学生 C「自分の英語がちゃんと伝わるか心配だった。いきなり直接的な交流をするよりもやりやすく感じた。メキシコの動画を見て、自分が考えている日本のイメージとだいたい同じだった。日本にリスペクトを持ってくれていることを感じた。自分は発音がダメなところがある。メキシコの人々が陽気である、食べ物がおいしいなどがステレオタイプだと思った。次回は、伝わる英語を話す。」

学生 D「自分の話す英語が相手にきちんと意味が伝わるのかが心配でした。また自分が話し

た内容が相手にとって不快になっていないかが気になりました。スピーキングは英語学習において非常に重要なことだと思っているので、この機会にスピーキングを鍛えることができて良かったと感じています。メキシコの動画を見て、日本の文化に触れている生徒が多いように感じました。食事から祭りなど様々な日本の伝統的文化が知られているようでした。また日本の科学技術に触れている生徒もいました。これらに関して私は侍などの古すぎる文化ではなく、近現代の日本をちゃんと知ってくれていると思いました。メキシコの生徒の英語は、細やかな部分の発音が日本人の話す英語と比べてニュアンスが微妙に違うような気がしました。抑揚や舌の使い方が違うのかな、と思いました。自分の動画を見て、カメラを見て話す（目を見て話す）ことができていないと感じました。また自分の話す英語はメキシコの生徒と比べて抑揚があまりないように思いました。日本の学生は、メキシコについて、料理がおいしいこと、陽気な人が多いことをあげている人が多いように感じました。陽気な人が多いと思うことはメキシコに対するステレオタイプに当てはまるのではないかと思いました。次は自分のビデオの振り返りで感じたように、よりネイティブに近い英語の発音や抑揚を身につけたいと思いました。」

学生 E「自分は英語の発音にあまり自信がないので、自分の英語がメキシコの方たちに伝わるかどうかが交流する前はとても不安でした。また、文法にも自信があるわけではなかったので、自分の伝えたいことがきちんと伝わるのかということをとても不安に感じていました。今回メキシコの方々と交流してみて、メキシコの方々と自分たち日本の生徒との間には発音に違いがあると感じました。日本の生徒はもちろん個人差はありますが、時々カタカナの発音が混ざっているのに対して、メキシコの方々はそのようなことはなかったので、そこが自分たちの改善点であると感じました。メキシコの生徒が抱いていた日本のイメージの中で特に印象に残ったのが、工業が発展しているというイメージです。多くの人が日本のイメージといえば寿司などの日本食やアニメや漫画などを挙げがちですが、工業が発展しているというイメージは日本に住んでいるとあまり感じない部分だと思ったので、新しい意見だと感じました。メキシコの生徒さんたちは、発音がとてもきれいだと感じました。日本人の発音で起こりがちな、少しカタカナっぽい発音の部分がなく、聞き取りやすい英語だったと感じたので、見習わなければならないと感じました。また、日本について様々なイメージを持っていることがわかりました。自分のビデオを見て、発音がまだまだカタカナっぽいところがあると感じました。また、もっとはきはき喋るとより聞き取りやすいと思ったので、次は意識していきたいです。日本人がメキシコに持っているイメージには、メキシコ料理とサボテンが多いと感じました。特にメキシコ料理の中でもタコスのイメージが強い人が多かったですが、メキシコ料理にはさまざまな種類の料理があるので、ステレオタイプだと感じました。次回の交流では今回自分の動画を見て感じた反省点であるカタカナっぽい発音になってしまっている部分をなくすことと、もう少しはきはき喋ることを意識して改善していきたいです。」

第 2 回交流後振り返りの結果

学生 A「まだ異国の人に伝える姿勢がわからなく、慣れないが、こういう風に交流する機会

がほとんどないため、新鮮で楽しいです。人形やフルーツなど、メキシコの文化や特徴として日本では余り知られていないようなものを取り上げて紹介してくれてとても印象に残りました。また、私がメキシコと聞いて連想するものとしてあげていた「死者のお祭り」について詳しく教えてくれて、さらに行きたくなりました。自分の英語は、大体の単語は発音認識されていましたが、発音を 1 つ 1 つしている感じで、連結ができていないと感じました。」

学生 B「メキシコの文化には面白いものがあるなと思った。メキシコのお菓子を食べてみたいと思った。声が小さすぎるところは正しく反応されなかった。」

学生 C「普段知ることができないメキシコについての情報を知ることができてとてもためになる。死者の日にパレードが行われること。名前に反して華やかだと感じた。

自分の英語は、ある程度は音声認識されているものの、まだ細かいところが認識されていないため、細かいところまでしっかり認識されるようにしたい。」

学生 D「前回よりも英語が聞き取りやすくなったと感じた。フォークダンスの文化が印象に残った。自分もダンスをしている（K -POP）ので、ダンスの文化の違いを知ることができた。ところどころ自分の英語が認識されていなかったが、前回よりかは良くなった。」

学生 E「日本の文化について説明するうえで、日本では当たり前のこともメキシコの人にとっては新鮮なことである可能性があるため、外国の人と交流する上では、より細かく説明することが必要であると気づいた。メキシコの生徒が、フォークダンスについて話していたのがとても印象に残っていて、そもそもメキシコでフォークダンスが盛んであることを知らなかったため、驚いた。自分の英語について、前回の交流の時に字幕変換したときよりもきちんと字幕変換されている部分が多かったところから、前回より発音を意識した効果を実感することができた。」

第 3 回交流後振り返りの結果

学生 A「朝から運動したりと活発的な方が多くて、教会に行ってゴスペルを歌ったり、友達とパーティーしたりと、日本ではあまり見受けない週末の過ごし方をしていて聞いてて面白かったです。また、家族と過ごす時間も日本より長いのかなと感じました。メキシコについては本当に食べ物のイメージと死者の日のお祭りしかイメージがなかったので、少しはメキシコについて知れた感じがしました。家族や周りの人を大事にしていたり、イベントごと（宗教なのかわかりませんが）も大切にしている印象になりました。」

学生 B「メキシコの生徒は家族との時間を大事にしていて、休日の過ごし方に愛があふれていました。ディズニー映画のリメンバーミーを見た時と同じような心の温かさになりました。想像した通りの温かく、笑顔の素敵な方々でした。直接会って話してみたいと思えました。」

学生 C「多少の違いはあるが、日本の週末と大きな違いはないと感じた。

遠く離れた国であるため、日本とは全然違うと思っていたが、思っていたより共通点があった。」

学生 D「意外にも日本の（私たちの）生活と似たような感じだなとおもった。映画館に映画を見に行く人が多かった印象がある。最初に抱いていたメキシコのイメージとは異なり、意外に

日本と似ている箇所が多々あった。勿論メキシコ特有の文化の違いもあった。」

学生 E「家族と朝食を食べにレストランに行くという人もいれば、友達と映画に行く人、ゆっくり寝ている人もいて、日本人の週末の過ごし方と大差なく、どこの国の人も休日の過ごし方は人それぞれであると分かった。メキシコとの交流前と交流後で、メキシコやメキシコ人に対する印象は少し変化した。特に週末の過ごし方を聞いて、意外と日本人と大差ないんだなと分かったことが印象の変化につながった。」

交流の振り返りは、日本の学習者が無意識に持っているステレオタイプに、自ら気づく機会を与え、固定観念を変えるプロセスにつながったように思われる。生身の人間とコミュニケーションをとる体験と動画でその姿を客観的に何度でも見直すことができることで、文化的な学びと英語スキル的な学びや気づきが起こっていることが明らかとなった。浅井（1996）[(16)]は、ステレオタイプを、「他の社会、文化のメンバーについて、ある社会、文化のメンバーによって広範に受けいれられている固定的、画一的概念、イメージ」（p.111）と定義し、相手を個人として尊重した関係を築くための異文化コミュニケーションの障害となると指摘する。このステレオタイプに感情的側面が加わると偏見と結びつき、「自文化中心主義」な態度へとつながる危険性もはらんでいる。振り返りでは、交流前に持っていたメキシコへのイメージを学習者が変えていく様子が見られた。

６．結論

1）動画投稿の非同期型テレコラボレーションを通して、文化について、日本の英語学習者（大学生）は何を学び、どのように変化したのか。

このテレコラボレーションを通して、日本の学習者は、次の 3 点を学び、交流前に抱いていたメキシコの文化についての印象や固定観念、偏見が変化したことが明らかとなった。

一つ目は、メキシコの学習者から、自分達が知らないメキシコの文化を学び、さらに、他者であるメキシコ学習者から見た日本について知った。その中には、日本の学習者が持っていた日本のイメージとは異なるものがあった。2 つ目は、メキシコと日本の学習者が、無意識に持っていたステレオタイプが極端な単純化や誇張化であることに気づき、「ステレオタイプは必ずしも当てはまるものではない」ということを学んだ。3 つ目は、異なる文化を持つメキシコの学習者も、自分達と共通する点を持っていること、そして、人は個人個人で多種多様であるということを学んだ。

2）動画投稿の非同期型テレコラボレーションを通して、英語について、日本の英語学習者（学生）は何を学び、どのように変化したのか。

このテレコラボレーションを通して、次の 5 つの気づきや学びが日本の学習者に見られ、彼ら自身のスピーキングの方法や英語に対する考えに変化があったことが明らかとなった。1 つ目

が、伝えることの重要性への気づき、伝える意識が高まり、発音、抑揚、表現の方法を考え、修正するようになった。最も多くの学習者がこの点を挙げていた。2 つ目が、メキシコの学習者の動画と日本の学習者、特に自分自身の動画を見ることによって、英語の発音、抑揚、声の大きさ、話すスピードなどの音声的な側面おける自分の課題と、笑顔、ジェスチャー、堂々とした話し方といった非言語的な要素の課題に気づき、修正しようとしたことが明らかとなった。さらに Flip の音声認識よる字幕機能が、自分の発音への意識を高めるとともに、自分の発音の改善を確認するツールとして使われた。3 つ目が、英語学習者であるメキシコの中高生の上手な英語を聞いて、自分の英語の学習意欲を高めた。4 つ目として、流暢さ、発音などに進歩を感じた。5 つ目に、世界とつながるコミュニケーションツールとして、英語が重要であることに気づいた。

Flip を使った小規模な非同期型のテレコラボレーションによる異文化交流は、学習者に以上のような気づきや学びを起こしたことが明らかとなった。

７．課題

本研究は、Flip を使った小規模な非同期型のテレコラボレーションにおいて、日本の英語学習者が、何を学び、どのように変化するかを研究目的としたものである。しかし、学習者のアンケートと振り返りだけでは、全てを明らかにすることはできない。また、調査対象者も少ないため、一般化することはできない。今後も引き続き調査を重ねる必要がある。英語力に関しては、学習者の主観であり、客観的なスキルの評価も必要であろう。今後も長期的な視点で調査を続けていくことが望まれる。

---

(1) Byram, M.（2008）. *From Foreign Language Education to Education for Intercultural Citizenship: Essays and Reflections.* Clevedon, England: Multilingual Matters.

(2) Byram, M.（1997）. *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence.* Clevedon, England: Multilingual Matters.

(3) Godwin-Jones, R.（2013）. Integrating intercultural competence into language learning through technology. *Language Learning & Technology,* 17（2）, 1-11.

(4) Young, E.H. & West. R.E.（2018）. Speaking Practice Outside the Classroom:Literature Review of Asynchronous Multimedia-based Oral Communication in Language Learning. *The EUROCALL, 26*（2）, 59-78.
Godwin-Jones, R.（2013）. Integrating intercultural competence into language learning through technology. *Language Learning & Technology, 17*（2）, 1-11.

(5) 栗田智子、滝沢麻由美（2021）「ジェイアーンの国際協働学習の成果と課題の考察―グローバル・プロジェクトについての実践状況調査から―」『国際協働学習 iEARN レポート 2020 年度』,p.2-8.

(6) 藤井清美、魚立康夫、松橋由佳（2016）「テレコラボレーションによる異文化交流プロジェクト：コミュニケーションが滞る原因とは」C A J L E Annual Conference Proceeding p.33-38.

(7) Hirotani, M., & Lyddon, P.（2013）. The development of L2 Japanese Self-introductions in an asynchronous computer-mediated language exchange. *Foreign Language Annals, 46*（3）, 469-490.
Young, E.H. & West. R.E.（2018）. Speaking Practice Outside the Classroom:Literature Review of Asynchronous Multimedia-based Oral Communication in Language Learning. *The EUROCALL, 26*（2）, 59-78.

(8) Fujii, K., Elwood, A.J., Uotate, Y., Matsuhashi, Y., Wright, B., & Orr, B.（2015）. Leveraging the power of SNS in language education. *Proceedings of the 20th Conference of Pan-Pacific Association of Applied*

Linguistics（PAAL）, 49-50.
(9) Byram, M.（1997）. *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence.* Clevedon, England: Multilingual Matters.
Jauregi, K., & Canto, S.（2012）. Impact of native-nonnative speaker interaction through video-web communication and Second Life on students' Intercultural Communicative Competence[online]. In L. Bradley & S. Thouesny（Eds.）, CALL: Using, Learning, Knowing. *EUROCALL Conference, Gothenburg, Sweden, 22-25 August 2012, Proceedings,* 151-155.
(10) 藤井清美、魚立康夫、松橋由佳（2016）「テレコラボレーションによる異文化交流プロジェクト：コミュニケーションが滞る原因とは」*CAJLE Annual Conference Proceeding,* p.33-38.
(11) Young, E.H. & West. R.E.（2018）. Speaking Practice Outside the Classroom:Literature Review of Asynchronous Multimedia-based Oral Communication in Language Learning. *The EUROCALL, 26*（2）, 59-78.
(12) 古村由美子（2022）「コスタリカの大学生とのオンライン交流：日本人学生は、何をどのように感じ、学んだのか？」『Artes MUNDI』7, p.77-85.
(13) 山本敏幸、林康弘、渡邉正樹（2020）「ＣＯＩＬ型授業でアカデミック・インテグリティを実践した授業報告━台湾、致理科技大學と本学のアカデミック・ライティングー」『関西大学高等教育研究』11, p.109-114.
(14) 藤井清美、魚立康夫、松橋由佳（2016）「テレコラボレーションによる異文化交流プロジェクト：コミュニケーションが滞る原因とは」*CAJLE Annual Conference Proceeding,* p.33-38.
(15) 山下道世（2021）「対面授業におけるスピーキングとリスニング活動の代替として Flipgrid を活用した際の受講生の意見」『高田短期大学紀要』39, p.53-60.
(16) 浅井亜紀子（1996）「異文化コミュニケーション教育としてのステレオタイプ研究―体験学習アプローチー」『駒沢女子短期大学研究紀要』29, p.111-120.